紅梅　三首 其一

（一〇八二年）四十七歳

怕愁貪睡獨開遲
自恐冰容不入時
故作小紅桃杏色
尚餘孤瘦雪霜姿
寒心未肯隨春態
酒暈無端上玉肌
詩老不知梅格在
更看綠葉與青枝＊

怕愁す 睡りを貪りて 独り開くことの遅きを
自ら恐る 冰容の 時に入らざるを
故らに 小紅 桃杏の色を作し
尚ほ 孤瘦 雪霜の姿を余せり
寒心 未だ肯へて 春態に 随はず
酒暈 端無くも 玉肌に上る
詩老は 知らず 梅格の在るを
更に看る 緑葉と青枝とを

＊石曼卿紅梅詩云　認桃無綠葉，辨杏有青枝
「桃と認めむには緑葉無く、杏と弁ぜむには青枝有り。」

【語釈】○**怕愁**…怕羞(pàxiū はにかむ)の意か。○**貪睡**…眠りから覚めやらぬ美人のさま。○**冰容**…氷のように白い顔。○**寒心**…冬の雪霜に鍛えられ、孤瘦な身に宿る、冬の気そのもののような心。○**春態**…なまめかしいさま。元来、春のさま。○**酒暈**…顔にほんのりあらわれた酒の酔い○**梅格**…梅の風格。格は格致、おもむき。気韻。

【通釈】うまいを貪るうちにひとり咲きおくれたと恥ずかしがってなのか、それともあの白梅の、氷のような冷たい顔つきでは、うららかな季節にふさわしくないと思ってなのか、ことさらに桃や杏のようなほんのりとしたあかみを顔にのぼせながらも、さすが霜雪に耐えぬいて来た孤高なやせすがたを失ってはいない。冬の気に鍛えられた彼女のこころは春のなまめかしさの中にそのまま溶け込んでゆくには抵抗しながらも、ほんのりまわった酒の酔いが、彼女の気づかぬまに玉の肌を染めていたのである。ところで老成した詩人には、紅梅のもちあじがどこにあるのか、おわかりにならぬらしい。花の外に緑葉だの青枝だのをごらんになる。

蘇東坡（近藤光男より抄出）